

『源氏物語』係結考

——「若菜上」における——

山口 雄 輔

文芸作品は、それぞれの作品がそれぞれ独自の文体を持つ。その文体も、時代により大きく異なる傾向があると思われるが、『源氏物語』のような大作では、五十四帖の一帖一帖の文章に特徴があるはずである。その落差が大きければ、ひよつとすると同一作者の手によるのではないのかも知れないという危惧さえも生ずることになりかねない。同一作者であっても、若い時と老後とでは文章の書きぶりも変わって行くと考えるのが自然であろう。いずれにしても、まず一帖一帖慎重に調査し、統計的处理を施しておくことが必要と思われる。そういう意味で、「係り結び」の出現率は、一つの手掛かりになるのではないか。何分にも歴大な数なので、賽の河原に石を積み上げるような気の遠くなる仕事ではあるが、「着手は半ば成就なり」という諺を励みとして、何とかがんばって行くしかあるまい。御叱声を乞う次第です。

キーワード… 語法、文体、表現、係り結び、文末形式

一

「若菜上」の全文（和歌も含む）における係助詞「ぞ」

「なむ」「や」「か」「こそ」の総数は四二〇例で、各係

助詞の比率は、次の表1のとおりである。「や」は疑問

・反語の場合に限り、いわゆる間投助詞の「や」は除外した。百分率の数値は小数点以下第二位を四捨五入してあるので、計の一〇〇パーセントの値に多少の誤差が生じることがある。全文の表から、言語場面により、和歌と散文、散文を更に地の文と話の文、話の文

を又更に、会話文と心話文という具合に、次第に詳しい表を作って見て行くことにする。

表1 若菜上(全文)

百分率	用例数	
15.5%	65 (3)	ぞ
30.5%	128 (0)	なむ
15.0%	63 (2)	や
11.7%	49 (3)	か
27.4%	115 (2)	こそ
100%	420 (10)	計

()内は和歌に含まれる用例数

韻文である和歌は別に扱うことにして、表1から()内の数を引いて、次の表2を作る。「なむ」「なん」は区別せず、「なむ」として扱った)

表2 若菜上(散文)

百分率	用例数	
15.1%	62	ぞ
31.2%	128	なむ
14.9%	61	や
11.2%	46	か
27.6%	113	こそ
100%	410	計

ここで係助詞を出現率順に並べかえ、数字を一切なくして、至極単純な表3を作ってみよう。そうすることによって、どの係助詞がよく使われているかが一目瞭然になるはずである。そして、(A)上位二位と、(B)最

上位および最下位に着目した型の名を付しておく。

表3 若菜上(散文における係助詞出現順位)

係助詞	一位	二位	三位	四位	五位
なむ					
こそ					
ぞ					
や					
か					

(A)なむ—こそ上位型
(B)なむ—か 遠隔型

表2・3によれば、「若菜上」の、和歌を除く全散文中において、係助詞「ぞ」「なむ」「や」(紛らわしいが間投助詞「や」は除外した)「か」「こそ」の総数は四一〇例であり、そのうち「なむ」の使用率三二・二%(二二八例)が最も高く、「こそ」が二七・六%(一一三例)でそれに次ぎ、この「なむ」と「こそ」の二種の係助詞だけで既に五〇%を上回っている。このような分布の型を(A)なむ—こそ上位型と呼んでおく。更に、「ぞ」がぐつと引き離れた一五・一%(六二例)で中位を保ち、そのすぐ下に「や」が一四・九%(六一例)と続き、最下位が「か」の一・二%(四六例)となる。最上位の「なむ」とはかなり隔たっているという意味で、仮りに、(B)なむ—か遠隔型と呼んでおく。

ここで、係助詞の出現する場面を、いわゆる言語場

面に分けて、それぞれの場面の出現率を見ることにする。ここで言う言語場面とは、地の文と会話文と心話文（心中思惟）の三場面である。消息文は話の文に含まれる。

表 4 若菜上（散文 言語場面別）

百分率	計	会話文		心話文		地の文		
		百分率	回数	百分率	回数	百分率	回数	
15.1%	62	5.2%	13 (1)	10.4%	8	49.4%	41	ぞ
31.2%	128	40.8%	102 (7)	5.2%	4	26.5%	22	なむ
14.9%	61	10.8%	27 (1)	32.5%	25	10.8%	9	や
11.2%	46	10.8%	27 (3)	19.5%	15	4.8%	4	か
27.6%	113	32.4%	81	32.5%	25	8.4%	7	こそ
100%	410	100%	250	100%	77	100%	83	計

() 内は消息文の数。

表 4 は、用例数と百分率の数値が交互に並んでいるためにかえって読み取りにくいこともあるので、表 2

から表 3 を作ったように、数字ぬきの単純な表 5 を作る。

表 5 若菜上（言語場面別出現順位）

会話文	心話文	地の文	
なむ	こそや	ぞ	一位
こそ	か	なむ	二位
かや	ぞ	や	三位
ぞ	なむ	こそ	四位
		か	五位

このように言語場面別の表を作って比べて見ると、当然のことながら、各係助詞の出現順位が、言語場面によって大きく変動する。

地の文に、客観的に指示する性質を持つと言われる「ぞ」が最上位にあるのはうなずけるが、語りかける性質を持つと言われる「なむ」が上位二位を占めていることは注目される。そうした地の文に出現する「なむ」二二例のうち一例を掲げておく。

○かゝる折にはめでたくなむおぼえける。

【地】二七六⑩

心話文になると、相手への問いかけや疑問を表す

「や」と「か」が上位に躍り出る。ここで注目されるのは「こそ」が最上位にきている点である。

会話文では、「なむ」に次いで、指示する力の程度が最も強いと言われる、強調の「こそ」が地の文の四位から上位進出している。その「こそ」の例を一つ。

○よく思し召し定めてこそ、よく侍らめ。

話二二三⑩

注―話主は乳母。

例によつて、上位二位に注目した型の名称を(A)、最上位と最下位に注目した名称を(B)として次に示す。

地の文	Aぞ―なむ上位型	Bぞ―か 遠隔型
心話文	Aや・こそ―か 上位型	Bや・こそ―なむ遠隔型
会話文	Aなむ―こそ上位型	Bなむ―ぞ 遠隔型

これによつて、表5でも読み取れたことが一層歴然となつたわけである。

表5によつて、どの言語場面にはどんな出現順位で各係助詞が並ぶかを見たわけだが、今度は逆に、それ

ぞれの係助詞がどの言語場面によく出現するかしないかを見るために、表6を作る。これまでのように縦に比率を見るのではなく、横に比率を見るようにした。

表6 若菜上(散文 係助詞出現順位)

百分率	計	会話文		心話文		地の文		
100%	62	21.0%	13	12.9%	8	66.1%	41	ぞ
100%	128	79.7%	102	3.1%	4	17.2%	22	なむ
100%	61	44.3%	27	41.0%	25	14.8%	9	や
100%	46	58.7%	27	32.6%	15	8.7%	4	か
100%	113	71.7%	81	22.1%	25	6.2%	7	こそ
100%	410	61.0%	250	18.8%	77	20.2%	83	計

表6によつて、「ぞ」なら「ぞ」が地の文に多いというのも、百分率の数値で知ることができる。すなわち、「ぞ」は地の文だけで他の言語場面を圧して六六・一%も占めていることがわかる。「なむ」は会話文に最も多

く、七九・七％を占める。「や」は会話文に四四・三％、心話文に四一・〇％見られる。「か」は会話文に多く半数を上回る五八・七％である。「こそ」も圧倒的に会話文に多く七一・七％を占めている。例によって、数字を除いた単純化の作業を行い、表7を得る。係助詞別の言語場面の出現順位である。

表7 若菜上(係助詞別)

	一位	二位	三位
ぞ	地の文	会話文	心話文
なむ	会話文	地の文	心話文
や	会話文	心話文	地の文
か	会話文	心話文	地の文
こそ	会話文	心話文	地の文
合計	会話文	地の文	心話文

表7ですぐ気付くことは、「ぞ」を除く、全ての係助詞において、会話文が一位にきているところである。語りかける性質の「なむ」で、会話文が一位にくるのは当然にしても、「こそ」の場合も会話文が一位にきて

いる。「ぞ」の一位は地の文である。「こそ」は主観的、「ぞ」は客観的という性質で一応の説明はつきそうである。他の卷々ではどのようなようになっていく興味深いところである。

二

次に、係助詞の文法的用法、つまり、各係助詞に対応する結びがどのようなかについて調べた結果を示す。文末にくる係助詞の、終助詞的用法を認める立場に立って、通常の係り用法に対して特に断止法として扱う。係り用法を、結びの活用語の品詞によって、動詞、補助動詞(待遇表現に限定)、形容詞、形容動詞、助動詞、名詞、副詞に分け、更に結びの省略用法と消去用法(いわゆる結びの流れ)の項を設けることにする。

表8 若菜上(散文 全用法)

百分率	総数	こそ	か	や	なむ	ぞ	係り用法		
							動詞	補助動詞	形容詞
6.3%	26	12 ₍₁₎		2	10	2	動詞		
5.1%	21	3	1	1	12	4	補助動詞		
4.4%	18	13			3	2	形容詞		
0.2%	1	1					形容動詞		
51.2%	210	61	34	25	56	34 ₍₁₎	助動詞		
							名詞		
							副詞		
18.8%	77	14	6	21	34	2	省略用法		
7.3%	30	9	2	1	13	5	消去用法		
6.6%	27		3	11		13	断止法		
100%	410	113	46	61	128	62	合計		

()は破格用法

係り用法のうち、結びに用言をとるものはあまり多くはなく、動詞が六・三%、形容詞が四・四%、形容動詞に至っては〇・二%である。助動詞を結びとするものは五一・二%で全体の半分を越える。結びの省略

用法は一八・八%で助動詞に次ぐ高率であり、それも「なむ」に多い。結びの消去用法、いわゆる「結びの流れる」用法は七・三%で意外に少なく、これも「なむ」に多い。断止法は六・六%で、「ぞ」「や」に多い。補助動詞の五・一%は待遇表現なので、係り結びと敬語の間に相関関係があるかどうかという重要な問題をはらんでいるので後に改めて述べる。

それではこれから、各係助詞の用法の展開を、実際に即して見て行くことにする。「ぞ」「なむ」「や」「か」「こそ」の順に、三つの言語場面別の表を作り、係助詞の用法を、まず大きく、

I 係り用法

II 断止法

の二つに分け、Iの係り用法を、(一)結びの語が用言の場合、三つの品詞からそれぞれ代表的な用例を掲げるが、皆無の場合もその旨を断つて進める。名詞・副詞などの特殊な例は「若菜上」には見当たらず、従ってそれらの項は成立しない。ただし、他の巻や他作品との比較を考慮して表には空欄を設けた。助動詞は数も多いので、改めて(二)として、助動詞の種類別に例を掲

げる。結びの省略用法を(三)、消去用法を(四)とする。(五)として結びに敬語の補助動詞がくる場合、(六)として、男女の使い分けについて触れる。IIの断止法では、いわゆる終助詞的な用法について述べる。

表9 若菜上(散文)

百分率	合計	会話文		心話文		地の文		ぞ		係り用法
100%	2	50.0%	1			50.0%	1	動詞		係り用法
100%	4	25.0%	1			75.0%	3	補助動詞		
100%	2					100%	2	形容詞		
								形容動詞		
100%	34	8.8%	3	2.9%	1	88.2%	30	助動詞		
								名詞		
								副詞		
100%	2	100%	2					省略用法		
100%	5					100%	5	消去用法		
100%	13	46.2%	6	53.8%	7			断止法		
100%	62	21.0%	13	12.9%	8	66.1%	41	合計		

I 係り用法

(一) 結びが用言の場合

「ぞ」の係り用法を表9で見ると、地の文に集中して、助動詞が多数を占め、用言では、動詞・形容詞に一・二例、形容動詞は見られない。動詞・形容詞から一例ずつ引く。

○春宮の宣旨なる内侍のすけぞ、つかうまつる。

〔地〕二八二⑫

○たゞかの、たえ籠りにたる山住みを、思いやるのみぞ、あはれにおぼつかなき。〔地〕三〇一⑥

表10 若菜上(散文)

百分率	合計	会話文		心話文		地の文		なむ	
100%	10	80.0%	8	20.0%	2			動詞	係り用法
100%	12	100%	12					補助動詞	
100%	3	100%	3					形容詞	
								形容動詞	
100%	56	69.6%	39	1.8%	1	28.6%	16	助動詞	
								名詞	
								副詞	
100%	34	85.3%	29	2.9%	1	11.8%	4	省略用法	
100%	13	84.6%	11			15.4%	2	消去用法	
								断止法	
100%	128	79.7%	102	3.1%	4	17.2%	22	合計	

表10によつて「なむ」の係り用法を見る。会話文における助動詞の多用ぶりが目立つ。同じく省略用法も目立つが、後に取りあげる。用言では動詞が十例、形容詞が三例見られるが、形容詞の一例。

○心一つにしづめて、有様に従ふなんよき

話二四〇①(話主—六條院(源氏))

表11 若菜上(散文)

百分率	合計	会話文		心話文		地の文		や	
100%	2			100%	2			動詞	係り用法
100%	1			100%	1			補助動詞	
								形容詞	
								形容動詞	
100%	25	56.0%	14	36.0%	9	8.0%	2	助動詞	
								名詞	
								副詞	
100%	21	23.8%	5	52.4%	11	23.8%	5	省略用法	
100%	1					100%	1	消去用法	
100%	11	72.7%	8	18.2%	2	9.1%	1	断止法	
100%	61	44.3%	27	41.0%	25	14.8%	9	合計	

表11によつて「や」の係り用法を見る。会話文における助動詞が十四例というのが目立つ。用言では心話文に動詞が二例あるだけである。その一例。

○時くは「老いやまさる」と見給へくらべよかし。

心二四五⑫(話主—玉鬘)

表12 若菜上(散文)

百分率	合計	会話文		心話文			地の文			か	
										動詞	補助動詞
100%	1	100%	1							形容詞	形容動詞
100%	34	55.9%	19	35.3%	12	8.8%	3			助動詞	名詞
										副詞	省略用法
100%	6	66.7%	4	33.3%	2					消去用法	断止法
100%	2	50.0%	1			50.0%	1				合計
100%	3	66.7%	2	33.3%	1						
100%	46	58.7%	27	32.6%	15	8.7%	4				

表12を見ると「か」の係り用法における用言の項は全く空欄である。それに対して表13の「こそ」の方では、比較的用言が多用されている。「か」は疑問の係助詞、「こそ」は確定の係助詞と、文法的性質が相反することに關係があるのだろうか。特に「こそ」は平安後期の作品では多用されるようになるはずである。「こ

そ」の形容動詞の一例。

○「さこそはうへにははぐみげなれ」

〔心〕二九八⑩(話主—継母)

表13 若菜上(散文)

百分率	合計	会話文		心話文		地の文		こそ		係り用法
								動詞	補助動詞	
100%	12	66.7%	8	25.0%	3	8.3%	1			形容詞
100%	3	100%	3							形容動詞
100%	13	84.6%	11	7.7%	1	7.7%	1			助動詞
100%	1			100%	1					名詞
100%	61	73.8%	45	23.0%	14	3.3%	2			副詞
										省略用法
100%	14	50.0%	7	42.9%	6	7.1%	1			消去用法
100%	9	77.8%	7			22.2%	2			断止法
										合計
100%	113	71.7%	81	22.1%	25	6.2%	7			

(二)結びが助動詞の場合
表14 若菜上(結びの助動詞一覧)

百分率	合計	こそ			か			や			なむ			ぞ				
		会話文	心話文	地の文	会話文	心話文	地の文	会話文	心話文	地の文	会話文	心話文	地の文	会話文	心話文	地の文		
1.0%	2														2	る	自発可能	
2.4%	5	1	1	1	1						1					つ	完了	
1.9%	4							1			2				1	ぬ		
1.0%	2										1			1		たり		
2.9%	6										1				5	り		
7.1%	15	3									9			1	2	き	過去	
27.6%	58	9	5	1							10	1	15		1	16	けり	
3.3%	7	5									2						なり	断定
1.4%	3	2	1														なり	伝聞
2.4%	5	1				2		1							1		けむ	推量
1.4%	3							2							1		らむ	
30.0%	63	16	5		15	7	3	7	7	2				1			む	
9.5%	20	3			3	2		1	1		10						べし	
1.9%	4		1			1		1	1								まし	
3.3%	7	2	1					1			1		1		1		めり	
1.4%	3										2				1		ず	打消
1.4%	3	3															まほし	希望
100%	210	45	14	2	19	12	3	14	9	2	39	1	16	3	1	30	合計	

表14は、圧倒的に優勢である結びの助動詞の場合を、助動詞の種類別に三つの言語場面も考慮して表にしたものである。

「若菜上」(散文)における結びの助動詞の総数は、既に表8にも記されたとおり二一〇例である。「る」「つ」「ぬ」「たり」「り」「き」「けり」「なり」(断定)「なり」(伝聞)「けむ」「らむ」「む」「べし」「まし」「めり」「ず」「まほし」の一七種の助動詞が、係り用法の結びとして用いられている。その中で優勢なものは、「む」の六三例、三〇%で、続いて「けり」の五八例、二七・六%である。「けり」については、指示の係助詞「ぞ」と「なむ」の地の文に比較的多く出現している。他はすべて十パーセントを越えていない。それでは、それらの用例を各助動詞について一例ずつ掲げておく。

る

○「と、身づからぞおぼし知らる。」地二六七⑨

つ

○誰くか物しつる。話三〇五①(話主—源氏)

ぬ

○「とてなん、まかり入りぬる。」話二八六⑬(話

主—明石入道)

たり

○匂ひなん、いとど、加はりにたる。話二二八③(話

主—朱雀院の御門)

り

○車にてぞ、仕うまつり給へる。地二二三⑬⑭

き

○さしおきてなん、念じたてまつりし。話二八五⑩

(話主—明石入道)

けり

○この頃こそ、いとつれづれに、紛るゝことなかり

けれ。話三〇四⑤(話主—源氏)

なり(断定)

○「あはれなる御譲りにこそはあなれ。話二三九⑧

(話主—紫の上)

なり(伝聞)

○この度こそとぢめなれ。心二三一⑭(話主—みか

ど・春宮(皆))

けむ

○いかなる願をか、心に起こしけん。心二九八①(話

主—源氏)

らむ

○古体のひが事どもや侍りつらん。話二八〇⑩(話主—明石上)

む

○なほ、わらは心の失せぬにやあらん。話二五〇①(話主—紫の上)

べし

○心ぼそきわざになん侍るべき。話二二三⑩(話主—乳母)

まし

○さもや、ゆづりおき聞えまし。心二二〇⑨(話主—朱雀院の御門)

めり

○みな、つどひまゐる御賀になんあめる。地二七四⑩

ず

○益なうてなん御消息もたてまつらぬを。話二八五⑥(話主—明石入道)

まほし

○花といはゞ、かくこそ、句はまほしけれな。話二

五四④(話主—源氏)

(三)結びの省略用法

次に、係り用法の中のいわゆる「結びなし」の場合について述べる。「結びなし」には結びの省略用法と消去用法とがあるが、先ず、結びの省略用法の表15を掲げる。

表15 若菜上(省略用法)

合	こそ			か			や			なむ			ぞ			いふ系
	会話文	心話文	地の文	会話文	心話文	地の文	会話文	心話文	地の文	会話文	心話文	地の文	会話文	心話文	地の文	
計	51	3	4	1	3	1	2	9	5	18	1	3	1			あり系
	26	4	2		1	1	3	2		11		1	1			その他
	77	7	6	1	4	2	5	11	5	29	1	4	2			計

括して「いふ系」と呼ぶことにする。この「いふ系」に対して、「あり」を主とするラ変系の動詞(敬体の「待り」も含む)を省略する場合を「あり系」、それ以外の一般の動詞を省略する場合を「為系」としておく。表

結びの省略用法は、省略された語の性質によって三つの場合に大別することができ。第一が、引用の格助詞「と」について、「とぞ」「となむ」「とや」「とこそ」などの形で、「言ふ」を省略する場合である。「言ふ」に限らず、「歌を(読む・詠む)、あるいはそういうものに助動詞のついた「よみける」なども一

では単に「その他」としてある。

表15によれば、あり系とす系は、五種すべての係助詞に出現すると共に、「なむ」の会話文に多く出現している点が目立つ。いふ系には、全く例がない。二つの系のそれぞれの係助詞から一例ずつ引いておく。

あり系

○「今朝、大将の物しつるは、いつかたにぞ。」話三

○四⑧(話主—夕霧)

○「あはれなる事なん」話二八八⑬(話主—尼君)

○「春の手向の幣袋にや」心三〇七①(話主—柏木)

○こゝには、いかなる心、置きたてまつるべきにか。

話三三九⑨(話主—紫の上)

○なほ、えならぬ心添ふ匂ひにこそ。話二六二⑭(話主—源氏)

す系

○「たづね給ふべき故もやあらんとぞ。」話二五七②

(話主—朱雀院)

○とてなん。話二九七①(話主—明石上)

○「これを、かくてや」話二六一⑩(話主—源氏)

○「位など、いまま少し、ものめかしきほどになりな

合	こそ			か			や			なむ			ぞ			接続助詞 体言 中止法 係助詞 修辭 計
	会話文	心話文	地の文	会話文	心話文	地の文	会話文	心話文	地の文	会話文	心話文	地の文	会話文	心話文	地の文	
24	6		2			1			1	8		2			4	
1			1													
2										1					1	
3	1									2						
30	7		2	1		1			1	11		2			5	

表16 若菜上（消去用法）

ば、などか^ハは」とも、おもひ寄りぬべきを。 ^心二
二六^⑮（話主—朱雀院の御門）
○「さらば、かくこそ^ハは」と ^心二四九^①（話主—紫の上）

「結びなし」
のもう一つの
用法、結びの
消去用法は、
「若菜上」では、
表16に見ら
れるように三
〇例である。
五種すべての
係助詞に散ら
ばっているの
で、それぞれ
一例ずつ掲げ
る。

○対のうへの御有様ぞ、なほありがたく「我ながら
もおほし立てゝけり」と、おぼす。 ^地二五六^⑦（中
止法）

○すべて、世の人の口といふ物なん、誰が言ひ出す
ることともなく、おのづから、人のなからひなど、
うちほほゆがみ、思はずなる事出で来る物なめる
を。 ^話二三九^⑮（話主—源氏）（中止法）

○さすがに、ほかさまに定まり果て給はんも、いか
にぞや^ハおぼえて、耳はとゞまりけり。 ^地二二八^⑫
〈接続助詞〉

○何事につけてかは、ふかき御心ざしをもあらはし、
御覽せさせ給はん ^地二七三^⑭（接続助詞）

○さらばこそ、さま々、ためしなき宿世にこそ侍
れ ^話二九一^⑦（話主—尼君）（係助詞）

次に、体言によって流れるという特異な例を掲げる。
その体言に圈点を付す。

○「いとあやしき、梵字とかいふやうなる跡に待め
れど、「御覽じとゞむべきふしもやまじり侍る」と
てなん。 ^話二九六^⑯（話主—明石上）

表17 若菜上 (補助動詞 敬語)

合	こそ			か			や			なむ			ぞ			計
	会話文	心話文	地の文	会話文	心話文	地の文	会話文	心話文	地の文	会話文	心話文	地の文	会話文	心話文	地の文	
7				1						3					3	尊敬語
4										4						謙讓語
10	3							1		5			1			丁寧語
21	3			1				1		12			1		3	計

表17は、結びに敬意を表す補助動詞が来ている例だけを集めて作成したものである。係り結びと待遇表現に相関関係があるかどうか知りたいところである。

表17によれば、全部で二一例あり、そのうちの二一例は「なむ」の会話文に現れている。三つの補助動詞のそれぞれの係助詞から一例ずつ

引いておく。

尊敬語

○うちはぶき給へるにぞ、やをら、ひき入りたまふ。

地三〇八⑦

○なながしどもかの御送りに麓まではさぶらひしが、

みな返し給ひて僧一人・童二人なん、御ともに侍

はせ給ふ。話二八七⑬ (話主—大徳)

○いにしへより、人の染めおきける藤衣にも、何か

やつれ給ふ。話二八七① (話主—明石入道)

謙讓語

○「となん、聞き侍る」話二九六⑦ (話主—明石

上)

丁寧語

○「身には、こよなくまさりて、長き御世にもあら

なん」とぞ、思ひ侍る。話二九三② (話主—明

石上)

○「いと、かく、にはかに、あまる喜びをなん、い

ちはやき心地し侍る」話二七五① (話主—源氏)

○「御覽じとどむべきふしもや、まじり侍る」心二

九七① (話主—明石上)

○夢の心地こそし侍れ」話二八〇⑫ (話主—明石上)

表18 若菜上(会話文 性別)

計		こそ		か		や		なむ		ぞ		
70.0%	175	63.0%	51	55.6%	15	81.5%	22	73.5%	75	92.3%	12	男
29.6%	74	37.0%	30	44.4%	12	18.5%	5	25.5%	26	7.7%	1	女
0.4%	1							1.0%	1			男 女
												不 明
												その他
100%	250	100%	81	100%	27	100%	27	100%	102	100%	13	計

表18は、会話文の話主の性別を考慮して作成したものである。性別というのが意外と識別に苦慮させられるものである。男は男性、女は女性は当然だが、男女とあるのは、「世の人々」などの例、不明は「ある人」などの例で識別不能。その他の欄は、妖怪・変化の類である。「若菜上」では、不明、その他の欄は出てこない。表では「なむ」の男性七五例が目立つ。他の巻と併せてまとめて論じるべきであろう。

II 断止法

表8によれば、断止法は二七例で、全用法の六・六％である。「ぞ」に一三例、「や」に一一例、「か」に三例あつて、「なむ」と「こそ」の断止法は見当たらない。「ぞ」「や」「か」の例をそれぞれ一例ずつ掲げておく。

○「あやし」とおぼゆる事ぞかし 話三二二②(話主—柏木)

○「若宮は、おどろき給へりや。 話二九三⑮(話主—源氏)

○「この藤よ。いかに染めけん色にか。 話二六二⑭(話主—源氏)

三

ここから和歌の場合に入る。

表19 若菜上(和歌)

百分率	用例数	
30.0%	3	ぞ
0%	0	なむ
20.0%	2	や
30.0%	3	か
20.0%	2	こそ
100%	10	計

「若菜上」には二三首の和歌が見えるが、係助詞「ぞ」「か」を含む和歌が三首ずつ、「や」「こそ」を含む和歌が二首ずつある。各係助詞から一例ずつ掲げる。

○ひかり出でんあか月ちかくなりにつけりいまぞ見し
世の夢語りする 歌二八六④

注「ぞ」の係り用法、結びは動詞。明石入道の詠。

○身にちかく秋や来ぬらん見るまゝに青葉の山も移るひにけり 歌二六八④

注「や」の係り用法、結びは助動詞。紫の上の詠。

○老いの浪かひある浦にたち出でゝしほたるゝあまを誰かとがめん 歌二八一⑩

注「か」の係り用法、結びは助動詞。尼君の詠。

○水鳥の青羽は色も変らぬを萩のしたこそ気色ことなれ 歌二六八⑥

注「こそ」の係り用法、結びは形容動詞。源氏の詠。

数が少なく出現順位のつけようもないが、他の巻との比較を考慮して出現順位の表 20 を次のように掲げておく。

表 20 若菜上（和歌における係助詞出現順位）

係助詞	ぞ	か	一位
	こそ	や	二位
			三位
			四位
			五位

(A) ぞか 上位型
(B) ぞこや 遠隔型

次に、和歌における係助詞の使用数を散文のそれと対比させた出現率を見ておく。

表 21 若菜上（散文との対比における出現率）

① 散文における係助詞	410
② 和歌における係助詞	10
②の①に対する百分率	2.4%

次に、和歌における係助詞の使用数と総歌数との割合を見ることにする。その際、参考までに『伊勢物語』における同様の数値を併記しておく。

表22 若菜上（総歌数に対する比率）

		伊勢物語	若菜上
① 総歌数		206	23
② 和歌における使用数	94		
②の①に対する百分率	45.6%	10	43.5%

「若菜上」の和歌における使用数の10という数値は、僅かな数ではあっても、比率として見れば、歌物語と呼ばれる『伊勢物語』の四五・六%という数値に比して、『源氏物語』『若菜上』の四三・五%は、かなり近い値である。

ここで、他の巻や、他作品との比較を考慮して、いわゆる確定の係助詞「ぞ」「こそ」の場合と、疑問の係助詞「や」「か」の場合を分けて、それぞれ表23・表24を作成しておく。ここでは『伊勢物語』における同様の数値を併記しておこう。

表23 若菜上（和歌における確定の係助詞）

		伊勢物語	若菜上
① 総歌数		206	23
② 確定の係助詞使用数	55		5
②の①に対する百分率	26.7%	21.7%	

表24 若菜上（和歌における疑問の係助詞）

		伊勢物語	若菜上
① 総歌数		206	23
② 疑問の係助詞使用数	39		5
②の①に対する百分率	18.9%	21.7%	

表23は、『伊勢物語』と「若菜上」の和歌に現れた確定の係助詞の数の、総歌数に対する割合を示したものである。『伊勢』の確定の係助詞使用数は五五例であり、総歌数二〇六首に対する割合は二六・七%である。「若菜上」の方は、確定の係助詞使用数はわずか五例しかなく、総歌数二三首に対する割合は二一・七%である。

表24は、疑問の係助詞の場合である。『伊勢』の疑

間の係助詞使用数は三九例であり、総歌数に対する割合は一八・九%である。一方、「若菜上」における疑問の係助詞はわずか五例で、総歌数に対する割合は二一・七%である。

表23・表24を通して言えることは、歌物語である『伊勢物語』と、『源氏物語』五十四帖の一帖に過ぎない「若菜上」とでは、それぞれの総歌数や、係助詞の使用数において非常に大きな差があるにもかかわらず、比率の数値がかなり近いということである。

注——テキストは岩波書店刊『日本古典文学大系源氏物語五』